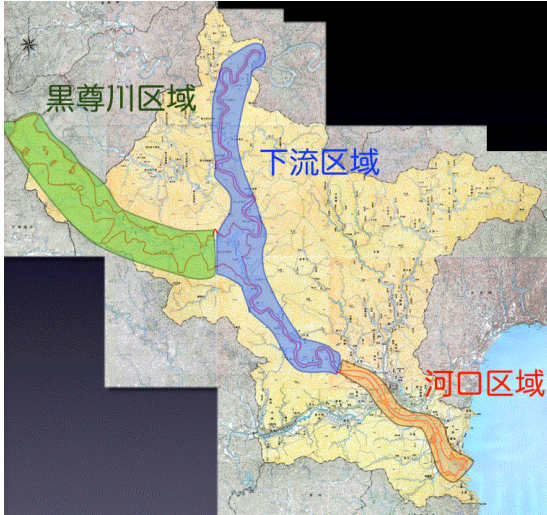


シリーズ第2回 四万十市 「重要文化的景観保護法」申出区域



清流通信読者の皆様こんにちは。

先月からスタートいたしました『重要文化的景観』の各市町の詳細レポート。まず今月は、四万十川下流域・河口区域の四万十市からのレポートです。



四万十市の文化的景観は、流域発展の基盤となった森林を持つ「黒尊川区域」、流通・往来の中継地が点在する「四万十川下流域」、物資の集積地として発展し関西圏への窓口として機能した「四万十川河口区域」の3つで構成されています。

これらの区域は、山・川・海の3要素を持つ地域が環をなすことで発展した当地域の特質を良く示しています。

【黒尊川区域】

黒尊山の紅葉→

黒尊山に代表される森林が、支流の黒尊川を経て本川に豊かな水量をもたらし、また地域産業としての林業を発達させました。周辺の森林は中世期より良材の産出地として知られ、京都へ木材を搬出した記録もあります。近代に入ると国有林事業の拡大とともに地域経済を支える産業の場として発展し、森林軌道の敷設や橋梁の架設など地域に大きな変化をもたらしました。

現在は林業だけでなく、黒尊山自然観察教育林等を利用した環境学習の場として利用され、様々な取組が行われています。



屋内の沈下橋 ↓



【四万十川下流域】

本川の西土佐半家（はげ）から佐田までの約 44 kmの区間と河畔域、口屋内集落を含む区域です。

かつて船母（センバ）や高瀬舟等の多様な川舟が往来し、流通の基幹として利用されていました。また、河川と丘陵の間の僅かな平坦地に多くの集落が営まれ、河川と密接な距離を保った生活が今に続いています。

本川と黒尊川との合流点に位置する口屋内集落は、黒尊の木材搬出地として河川と道路交通の両面で発展しました。集落内には渡し舟発着所跡、沈下橋、抜水橋が近接して存在し、段階的な渡河の様相が今に残るなど下流域の集落に点在する要素が集約していることも特徴です。

下田の倉庫 ↓

【四万十川河口区域】

本川の入田（にゅうた）から河口迄の 13.5 kmと河畔域、竹島川河口部、下田集落を含む区域です。

河口域には上流域からの物資が集まり、中村は幡多の経済活動の一大拠点として成長します。特に最河口に位置する下田は、土佐湾を介して古くは中世の日明貿易に始まり、近代の木材・薪炭の搬出まで幡多地域の主要港として機能し大きな発展を遂げました。

現在も下田の町並みには豪商の旧宅や倉庫、レンガ塀、バラスブロックなど港町としての特徴が多く残っています。また、広大な汽水域には多くの魚種が生息し、そこで営まれる漁労風景は四万十川の豊かさ象徴する景観となっています。

